

男女両性具有に関する研究

—アンドロジニー・スケールと性別化得点¹—

土 肥 伊 都 子²

1. 目 的

男女両性具有 (androgyny) はギリシャ語の男性 (andro) と女性 (gyne) に由来する語であり、古来より様々な概念に使用されてきた。例えば18世紀には植物学において雌雄同花序の植物を指すのに使用され、19世紀には天文学で惑星が他の遊星を伴っている状態を表すのに用いられた。そして、心理的側面で使用され始めたのは20世紀後半になってからのことであった。

Jung は、人間の普遍的無意識内に元型 (archetype) が存在することを仮定し、男性が持つ女性の永遠なイメージの元型をアニマ、女性が持つ男性の永遠なイメージの元型をアニムスと呼んだが、Jung 派の Singer はその著「男女両性具有」(1981)の中で、男女両性具有は人間の心理に固有な元型であって、それはあたかも卵の黄味と白味が殻の中に一緒に閉じこめられている状態である、と述べている。つまり男女両性具有とは男性の中に「女らしさ」が、女性の中に「男らしさ」が存在している状態であって、いわゆるJungのアニマとアニムスの両方がある状態である、というのである。

さて、この男女両性具有の概念は1970年代に入り、固定的な男女観に対するウーマン・リブ運動などによって注目され始め、実証的な性役割研究において扱われることになった。

そこで示される男女両性具有とは、男女の性別にかかわらず、男性にとって社会的に望まれるパーソナリティ特性を志向し受容し (男性性)、かつ女性にとって社会的に望まれるパーソナリティ特性を志向し受容する (女性性) 状態を指す。そ

して男女両性具有人間は物事の考え方が柔軟で、可能性としての行動範囲が広く、状況に応じて最適な行動を効果的に遂行することができ、心理的にも健康である、と考えられてきた。一方、これとは反対に性別化 (sex-typed) した人間、つまり男性性あるいは女性性のみが強い人間は、彼又は彼女の行動を内面化された性役割の基準に一貫させようと動機づけられ、その基準に不適切であると考えられる行動を禁じてしまうと考えられている。

男女両性具有は実証的には独立した2次元の男性性スケール、女性性スケールから成るアンドロジニー・スケールで測定される。

このアンドロジニー・スケールを用いて、例えば Bem は男性的行動の分野では集団圧力への非同調性 (1975)、女性的行動の分野では子猫との遊戯性 (1975) や大学生活に適応できない学生の良い相談相手になること (1976) などの実験場面を設定し、いずれの場合でも男女両性具有人間が最も優れた遂行をしたと報告している。また Spence ら (1975) によれば、自尊心 (self-esteem) も男女両性具有人間が最も高かった、という。日本では自己能力評価 (鹿内ら, 1982) などにおいて両性具有人間の社会的適応性が報告されている。

ところで最初に作成されたアンドロジニー・スケールは、Bem (1974) の Bem Sex Role Inventory (BSRI) である。

Ben は男性役割、女性役割のパーソナリティ特性200を集め、アメリカ社会においてそれらの特性を持つことは男性や女性にとってどれほど望ましいか、を7点尺度で評定させた。そして同一項目の男性、女性にとっての望ましさの評定点の差

1. 本稿は関西学院大学社会学研究科、昭和61年度修士学位論文の一部を修正し、加筆したものである。

2. 本論文の作成にあたり、御指導下さった田中國夫教授に深く感謝致します。

を求め、その t 値が有意であった項目を男性性、もしくは女性性項目としてそれぞれ20項目を選択した。これらに中性項目を加えた60項目が全項目とされた。

被験者は各項目に自分はどの程度あてはまるか、を自己評定し、男性性、女性性スケール項目の合計点が各々男性性得点、女性性得点となる。そして男性性得点も女性性得点も全被験者のメディアン値を上回った人が両性具有人間とされる。

アンドロジニー・スケールは BSRI の他に Spence ら (1975) の Personal Attributes Questionnaire (PAQ), Heilbrun (1976) の Adjective Check List (ACL), Berzins ら (1978) の PRF ANDRO scale などがある。

このようにして数量的に男女両性具有性の有効性は実証されてきたが、両性具有人間と判定された人間が必ずしも良い結果を生むとは限らないことも次第に明らかになった。Bem の予想とは反対に、性別化傾向の強い人(男性的男性と女性的女性)の方が心理的適応が良好であったり、自由に行動をコントロールできる、という報告が出されてきたのである。

これにつれて、男女両性具有性の概念自体への疑問と同時に、アンドロジニー・スケールに対する問題点も指針されることになった。

アンドロジニー・スケールの問題点として、まず第一に男性性、女性性各スケールの因子構造の不明瞭さが挙げられる (Pedhazur & Tetenbaum, 1979)。これはスケール項目を決定する際に、男性と女性にとっての望ましさが有意に異なるかどうかという点のみで項目を決定し、スケールの因子構造について検討されなかったのが原因である。しかしながら、一般に男性性、女性性は Bakan (1966) が自我発達の最終段階で統合されるべきものとして提起した作動性 (agency) と共同性 (communion)* にそれぞれ対応すると考えられている。

そこで本研究では、パーソナリティ特性の男性、女性にとっての望ましさの差をスケール項目決定の基準にすると同時に、男性性スケール、女

性性スケールがそれぞれ単一因子からなるアンドロジニー・スケールを作成する。

アンドロジニー・スケールの第二の問題点として、性役割観の多様性、つまり男女に対するパーソナリティ特性の望ましさの認知が個人により様々であることの軽視が挙げられる。アンドロジニー・スケールがあらゆる被験者に適用されるには、どの被験者にも男性性項目は女性よりも男性にとって、女性性項目は男性よりも女性にとって、より望ましいと認知されていること、つまり性役割観の普遍性が必要となる。そこで Bem (1974) は男女間で性役割観が異なるパーソナリティ特性はスケール項目から除外している。しかし性役割観の多様性は性別のみに見られるとは思われない。例えば年代や学歴などによっても違いが現れると思われる。従って本研究では、まず性別と年代による性役割観の多様性を明示し、次に従来の自己評価得点とは別に性別化得点を提起する。

性別化得点は、従来アンドロジニー・スケール項目選出のために測定されてきた、個人ごとの男性にとっての望ましさの評定点(以下、男性役割得点とする)から女性にとっての望ましさの評定点(以下、女性役割得点とする)を各項目ごとに差し引き、その絶対値を合計したものである。これにより、個人がどの程度パーソナリティ特性を性別化して認知する傾向があるか、が求められると考えた。

加えて、男性性得点、女性性得点と性別化得点の関係を求め、また、性別化得点の妥当性を検討するために、男性の社会的役割に対する態度を測定し性別化得点との関連性を検討する。

2. 方 法

(1)概略

既存の8アンドロジニー・スケールの全項目から、外見的レベルや興味、関心のレベルのものを除外し、意味が重複する項目を整理し、男性性項目、女性性項目各33項目ずつにまとめた。

次に20~40代の男性47名、女性74名、計121名

* 作動性と共同性は生命の持つ基本的な2つの機能と考えられ、作動性は個人に関係した自己維持、自己主張、自己拡大の機能、共同性は集団成員の中での協調の機能に相当する。

に、66項目全てについて男性役割得点、女性役割得点、自己評価得点を5段階評定させた。男性性項目33項目、女性性項目33項目の自己評価得点により別々に因子分析を行ない、同時に、全項目の男性役割得点と女性役割得点の平均値の差の検定を行なった。因子分析で各第I因子への因子負荷量が高く、かつ、男性性項目では各項目の男性役割得点が女性役割得点よりも有意に高いもの、女性性項目では各項目の女性役割得点が男性役割得点より有意に高いものを10項目ずつ選び、最終的な男性性項目、女性性項目とした。

アンドロジニー・スケール作成後、被験者の性別、年代の要因により、スケール項目における性別役割観がどのように異なるかを分散分析を行い検定した。

男性の社会的役割に対する態度スケールはまず既存の女性の社会的役割に対する態度スケールや、アメリカのマン・リップに関する文献の中から男性に社会的に期待されている役割内容を表したものを参考に50の予備項目を作成し、次に20～50代の男性196名、女性180名、計376名の被験者を用いて、それらの項目内容に賛成か反対かを5段階評価させた。その結果、全項目の合計点との相関係数が、.45以上の項目を選んで因子分析にかけ、これにより最終的な態度スケール項目20項目を決定した。

その後、男性性得点、女性性得点、性別化得点、態度得点の間の相関係数を求め、4者間の関連性や性別化得点の妥当性について検討した。

(2)スケール項目の収集

男性性項目、女性性項目を収集するために、以下の8アンドロジニー・スケール項目を引用した。(i)Bem (1974)のBSRI (Bem Sex Role Inventory), (ii)Spenceら (1975)のPAQ (the Personal Attributes Questionnaire), (iii)Heilbrun (1976)のACL (Adjective Check List), (iv)柏木 (1972)の知性、行動力、従順・美の3因子に高く負荷した項目, (v)伊藤 (1978)のMHFスケールよりM, F特性項目, (vi)若林ら (1982)のM, F特性項目, (vii)山口 (1985)の、男性、女性、父性、母性尺度の項目, (viii)長谷川 (1986)の、

具体的な男らしい男性像と女らしい女性像に基づくM, F項目、である。

これらの項目を男性性、女性性項目各33項目ずつに整理したが、その選択基準は、(i)現実の行動面ではなく幅広い社会的行動の可能性としての両性具有性を測定するために、外見的特性、行動レベルと興味、関心のレベルは除外する。(ii)男性性、女性性は共に本来人間として備えるべきものであり、その違いは社会的望ましさが男性、女性の場合で程度に差があることによつてのみ生じたと考えるために、項目の内容が人間にとって否定的に価値づけられたものは除く、の2点である。

次に66項目に関し、一般に男性、女性にとつてどのくらい望ましいと思うか、を評定させた(男性、女性役割得点)。反応形式は「非常に望ましい(5点)」～「あまり望ましくない(1点)」の5件法である。またそれらが自分にどのくらいよくあてはまるかを評定させた(自己評価得点)。反応形式は「よくあてはまる(5点)」～「ほとんどあてはまらない(1点)」の5件法である。

男性の社会的役割に対する態度スケールの予備項目は、女性の社会的役割に対する態度スケールであるDreyerらのISRO (A Scale to Measure Sex-Role Orientation)や、Spenceら (1972)のATW (Attitudes Toward Women Scale)と、マン・リップに関する文献より、50項目引用、作成した。そしてこれらの項目についてどのくらい賛成、もしくは反対であるか、を評定させた。反応形式は「賛成である(5点)」～「反対である(1点)」の5件法である*。

3. 結 果

(1)アンドロジニー・スケールの因子分析とスケール項目の選定

男性性、女性性各33項目の自己評価得点に基づいてそれぞれ主因子法による因子分析を行い、バリマックス回転にかけた。相対累積寄与率の増加量の減少傾向を因子打切りの基準としたところ、それぞれ第1因子のみを抽出した。

これに並行して、男性性項目では男性役割得点

* 高得点ほど、男性の社会的役割を強く志向することを示す。

が女性役割得点よりも有意に高い項目、女性性項目では女性役割得点が男性役割得点よりも有意に高い項目を選択した*。最終的なスケール項目はこの平均値の差の検定で有意で、かつ因子分析で第1因子に高く負荷した項目を10項目ずつ選び出し、アンドロジニー・スケールの男性性、女性性項目とした。

次にこれらの基準で選択したスケール項目が男性性、女性性として独立した斉合性のある意味次元を成しているか否かを確認するために、これらの20項目を再び因子分析（主因子法、バリマックス回転）にかけた。

相対累積寄与率の増加量の減少傾向を因子打切りの基準とし、2因子で打切った。因子負荷量はTable 1の通りである。

第1因子に高く負荷した項目は全て男性性項目であり、これらの項目は自己の持つ力を拡大させ、積極的に自分の道を切り開いていくための特性を示している。そして従来から男性性に対応す

ると考えられてきた作動性ともほぼ一致すると思われる。ゆえに本研究で作成した男性性スケールは作動性の単一因子から成ると言える。

第II因子に高く負荷した項目は全て女性性項目であり、これらの項目は相手を気遣い、相手の調子に合わせるといった、対人関係における潤滑油のような働きをする特性を示している。これも従来から女性性に対応すると考えられてきた共同性とはほぼ一致すると思われる。ゆえに本研究で作成した女性性スケールは共同性の単一因子から成ると言える。

そして両スケール項目は独立した斉合性のある意味次元を成していることが確認された。

(2) アンドロジニー・スケールの信頼性

アンドロジニー・スケールの男性性得点、女性性得点、性別化得点の全被験者の得点分布より上位1/3を上位群、下位1/3を下位群として抽出し、t検定によるGP分析を行った。その結果、各得点とも全項目で0.1%水準で上位群下位群間に有

Table 1 アンドロジニー・スケール項目の因子負荷量と男性・女性役割得点とt値

		因子負荷量		男性役割得点	女性役割得点	t 値*
		第I 因子	第II 因子			
男性性項目	自己主張のある	.89	-.00	4.5	3.9	8.3
	積極的な	.82	.19	4.5	3.9	8.08
	自主的な	.77	.03	4.6	4.2	7.60
	人に頼らない	.74	-.05	4.1	3.6	7.72
	行動力のある	.73	.30	4.7	3.9	10.42
	たくましい	.71	.23	4.5	2.9	13.43
	信念を持つ	.71	.06	4.7	4.2	7.44
	行動半径の広い	.69	.20	4.3	3.6	9.38
	前向きな	.68	.35	4.6	4.4	5.83
	独創力のある	.62	-.09	4.2	3.7	7.42
女性性項目	やさしい	.13	.80	4.2	4.7	6.61
	親切的な	.12	.77	4.3	4.6	6.08
	すなおな	.15	.74	3.9	4.4	6.98
	人に暖かい	.06	.68	4.4	4.6	4.16
	かわいい気のある	.12	.67	2.6	4.3	16.07
	人に尽くす	.17	.58	3.7	4.2	7.96
	同情心のある	-.03	.53	3.6	3.9	5.71
	気持ちの細やかな	.19	.46	3.6	4.4	10.73
	言葉使いの丁寧な	.12	.25	3.8	4.2	6.58
	慎み深い	.20	.24	3.1	4.0	9.67
寄与率 (%)	36.5	16.6	※全て P<.001			

* 各項目の男性役割得点、女性役割得点、t 値は Table 1 を参照。

意差が見られたため、各得点とも全項目の弁別力が認められた。

次に、各得点で用いられる個々の項目と、その項目を除いた他の項目の合計点との間の、項目—スケール間相関係数を算出した。その結果、大部分の項目で、.40以上の相関係数を示し、識別力が認められたが、女性性得点での「言葉使いの丁寧な」(r=.33)と性別化得点での「人に暖かい」(r=.31)でやや弱い相関となった。

また、各得点の等質性を検討するために、 α 係数を算出したところ、男性性得点は、.91、女性性得点は.86、性別化得点は.87となり、各得点方法の等質性は十分認められた。

(3)態度スケールの因子分析とスケール項目の選定

男性の社会的役割に対する態度を表した50の各態度得点と全態度得点との相関係数を算出し、 $r \geq .45$ の21項目について主因子法による因子分析

を行い、バリマックス回転にかけた。固有値1.0以上で切った結果、5因子が抽出された。各因子に、.30以上の負荷量を持つ項目を示したのがTable 2である。

第I因子に高く負荷した項目は、日常生活や人生において、男性は仕事を中心に置くべきだ、とする態度に関するもので、仕事中心因子と命名した。第II、第III因子に高く負荷した項目は、家父長制の夫婦の伝統的在り方に関した態度を表しており、特に第II因子は家庭の内側の夫婦関係、第III因子は家庭の外側から見た夫婦関係の家父長制についての態度を表している。ゆえに第II、第III因子をそれぞれ家庭内家父長制因子、家庭外家父長制因子と命名した。第IV因子に高く負荷した項目は、稼ぎ手としての夫の役割を強調した態度を表しており、稼ぎ重視因子と命名した。第V因子に高く負荷した項目は、家庭内での父や夫としての役割を犠牲にして仕事に専心することに関係す

Table 2 態度スケールの因子負荷量

項 目	因 子 負 荷 量					
	I	II	III	IV	V	
子供の寝顔しか見られない多忙さは、男には自慢の種になる。	.70	-.04	.10	.20	.21	
妻子を養うために、男性は少しでも長く残業するのがよい。	.65	.04	.00	.24	.02	
夫は妻子を養っているという優越感で、満足感を得る。	.52	.37	.12	.14	-.10	
男性にとって、最も大切な人間関係は仕事がらみの関係である。	.49	.42	.14	-.21	.07	
男性が家庭に目を向けることは、仕事面にはマイナスになる。	.48	.01	.51	.01	.16	
出世をして同僚に差をつけることこそ、男の人生である。	.40	.12	.02	.65	-.08	
男性は、定年まで仕事さえしていれば、老後もまず心配はない。	.38	.28	.22	.07	.04	
夫婦の学歴は、夫の方が高いことが望ましい。	.07	.69	.11	.10	.06	
家庭内の重大事を決定するのは、夫である方がよい。	.12	.68	.14	.03	.16	
夫は妻よりも世の中のことをよく知っているべきである。	.10	.66	-.04	.22	.02	
フルタイムで働く妻を持つ夫は、心理的負担が重く気の毒である。	.15	.42	.52	.00	.04	
妻が外で働けば、その夫は負い目を感じるにちがいない。	.01	.15	.71	.27	.05	
企業社会において立派な男性は、妻子がいないかのごとくふるまう。	.25	.00	.62	.15	.05	
妻の収入を下回る夫は、半人前である。	.12	.12	.23	.74	.13	
男性一人で家庭の生活を支えるのは、当然のことである。	.03	.27	.36	.56	.31	
夫は家族のためにすべてを稼ぐのが当然である。	.23	.40	.24	.47	.24	
男性の子育てを促進するためには、労働時間を短縮するべきである。	.13	-.01	-.04	.05	.84	
男性社員にも育児時間が認められても良いと思う。	.04	-.17	.20	.09	.79	
夫は仕事のためにある程度家族を犠牲にしても、許される。	.33	.32	.02	.22	.38	
妻が病気になったからといって、夫が会社を休むべきではない。	.41	.12	.30	.09	.33	
寄 与 率	(%)	28.3	6.9	6.5	5.7	5.1

る態度を表しており、家庭内サービス放棄因子と命名した。

第Iから第V因子までのいずれに対しても負荷量の低かった項目は、「病気でなくても食事に気をつかうのは男らしさをそこなう」であった。この項目を除き、5つの因子への負荷量の高かった20項目を最終的な態度スケール項目に決定した。

(4)態度スケールの信頼性

アンドロジニー・スケールの場合と同様に、各スケール項目についてt検定によるGP分析を行った結果、全項目において0.1%水準で上下群間に有意差が見られ、弁別力が認められた。

次に各項目とスケール合計点との項目一スケール間相関係数を算出したところ、全項目で、.40以上の相関係数を示し、識別力が認められた。

最後にスケールの等質性を検討するためにα係数を算出したところ、α=.79となり、十分な等質性が認められた。

(5)性別、年代による性役割観の多様性

Table 3は男性性項目の男性役割得点、女性性項目の女性役割得点が、性別と年代により異なるかどうか、を分散分析により求めた結果である。

年代の効果は20項目中3項目において傾向が認められたのみだったが、性別の効果は女性性10項目中4項目において有意に認められた。それら4項目の男女別平均点を算出したところ、4項目とも女性被験者より男性被験者の方が女性役割得点が高かった。つまり、女性性を示すパーソナリティ特性の中には女性自身よりも男性の方が、女性にとって望ましいと評価する傾向が強いものが多いことが明らかになった。

(6)男性性、女性性、性別化、態度得点の相関関係

男性性、女性性、性別化、態度得点の間の男女別相関係数はTable 4に示す通りである。これによると、男女ともほぼ同様の結果を示し、男性性と女性性の間にはやや強い正の相関が認められ、特に男性においてその傾向が強かった。また、男性性、女性性得点と性別化得点の間には、男性の

Table 3 性別、年代別男性(女性)役割得点とf値

		f 値		男性(女性)役割得点				
		性別	年代	男女別		年代別 [ⓐ]		
				男性	女性	20代	30代	40代
男性性項目	自己主張のある	.03	.04	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5
	積極的な	.58	.34	4.4	4.5	4.6	4.5	4.5
	自主的な	.73	1.88	4.7	4.6	4.8	4.6	4.6
	人に頼らない	.45	3.00 (*)	4.1	4.2	3.9	4.3	4.3
	行動力のある	1.44	.61	4.6	4.7	4.7	4.6	4.8
	たくましい	.06	.57	4.5	4.5	4.6	4.6	4.4
	信念を持つ	.12	.68	4.8	4.8	4.7	4.8	4.9
	行動半径の広い	.17	1.01	4.3	4.3	4.4	4.2	4.4
	前向きな	1.16	1.01	4.6	4.7	4.8	4.6	4.5
	独創力のある	* 7.92	.68	4.5	4.0	4.2	4.1	4.5
女性性項目	やさしい	* 4.15	.43	4.8	4.6	4.6	4.7	4.7
	親切的な	.48	.27	4.7	4.6	4.7	4.6	4.6
	すなおな	.71	2.64 (*)	4.4	4.3	4.6	4.2	4.4
	人に暖かい	.04	1.39	4.6	4.6	4.5	4.7	4.5
	かわい気のある	1.49	2.55 (*)	4.4	4.2	4.5	4.2	4.1
	人に尽くす	*** 15.25	1.93	4.6	4.0	4.3	4.2	4.1
	同情心のある	** 8.70	1.00	4.2	3.7	3.8	4.0	3.9
	気持ちの細やかな	* 4.94	.23	4.6	4.3	4.5	4.4	4.4
	言葉使いの丁寧な	.54	.18	4.3	4.2	4.2	4.3	4.2
	慎み深い	1.39	1.60	4.1	3.9	4.0	3.8	4.2

(*) P<.1 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

ⓐ20代 N=40, 30代 N=51, 40代 N=28

Table 4 男性性, 女性性, 性別化, 態度得点の相関
(右上半分…男性, 左下半分…女性)

	(1)	(2)	(3)	(4)
(1) 男性性		***.72	.21	.09
(2) 女性性	** .36		.02	-.01
(3) 性別化	*-.23	.15		** .39
(4) 態度	-.05	.21	** .31	

*P<.05
**P<.01
***P<.001

場合はほとんど相関は認められなかったが、女性の場合は男性性得点と性別化得点の間に弱い負の相関が認められた。つまり、女性はパーソナリティ特性に、性別に基づく社会的望ましさの違いを認知する傾向が強いと、男性性を損うことが明らかになった。

態度得点と有意な正の相関を示したのは性別化得点であり、性別化傾向が強い人は男性の社会的役割に対しても強い志向性を持つことが認められた。

4. 考 察

本研究において考察すべきことは、アンドロジニー・スケールの男性性, 女性性項目の内容の検討, 性別化得点と男性性, 女性性得点の関係, 性別と年代による性別役割観の多様性, そして男性の社会的役割に対する態度スケールを用いた, 性別化得点の妥当性である。

(1)男性性, 女性性項目の因子分析と両者の関係について

本研究では男性性, 女性性を独立した2次元としてとらえたため、既存のアンドロジニー・スケールの男性性, 女性性項目を別々に因子分析にかけた。また男性役割得点と女性役割得点の平均値の差の検定の結果を並行させて最終的なアンドロジニー・スケールを作成した。

アンドロジニー・スケール全20項目を再び因子分析にかけたところ、作動性に対応した男性性と、共同性に対応した女性性の、独立した意味次元がほぼ確認された。しかしながら、女性性項目の中には第II因子への負荷量が低い項目がみられた(「言葉使いの丁寧な」, 「慎み深い」)。これは女

性性が単一因子ではとらえ難いことを示している。伊藤(1986)によれば、これまで女性性として扱われてきた内容には、共同性と美・繊細さの2つの次元が含まれている、という。本研究で第II因子への負荷量が低かった項目も、美・繊細さの要素が含まれると考えられ、共同性だけで女性性を包括するのは、不十分と言えよう。

次に男性性得点と女性性得点の相関は、男性被験者で $r = .72$ 、女性被験者で $r = .36$ であり、正の相関が認められた。これは最近の研究結果と類似する。Spenceら(1975)は $r = .14 \sim .47$ 、若林ら(1981)の「力強さ」と「親しみやすさ」では $r = .31 \sim .45$ であり、いずれも正の相関を示している。最初のアンドロジニー・スケールを作成したBemは男性性と女性性を独立するものとしてとらえ、相関も $r = -.14 \sim -.11$ と低かった。一方、本研究で作成したアンドロジニー・スケールを含めてBem以降のスケールで正の相関が見られた理由として、まず第一にスケール項目を収集する際に、男性性も女性性も、人間として男女双方に望ましい特性であることを前提にしたためであることがあげられる。また第二の理由として考えられることは、本来、男性性と女性性はかなり共通した部分があるということである。伊藤(1978)は男性, 女性役割各55語のチェックリストをそれぞれ主因子法による因子分析にかけたが、そこで男女両役割概念の第I因子に、多くの共通の項目を見出している。本研究は男性性と女性性を独立したものと仮定したため、男性役割得点と女性役割得点の有意差を基準に、伊藤(1978)の言う男性性と女性性の重複部分は除外したつもりであった。にもかかわらず男性性得点と女性性得点の間には正の相関が見られ、スケール作成の操作が有効でなかった。ゆえに本研究の男性性と女性性も完全に独立したものではないことを認めざるを得ないであろう。けれども、男性性, 女性性を完成させるには、それらの重複部分も大きな役割を担っているとも考えられる。今後男性性, 女性性の重複部分をそれらの一部分として残すべきか、お互いを独立させるために削除するべきか、検討を加える必要があると思われる。

(2)性別化得点と男性性, 女性性得点

女性被験者において男性性得点と性別化得点の

間にやや弱い負の相関が認められた以外は、性別化得点と男性性、女性性得点の間には相関は認められなかった。

人間はおそくとも満3歳までに性の同一性を獲得し、自己を男性、あるいは女性として認めることができるようになる。ゆえにそれ以後の年齢において、男性が男性役割に加えて女性役割のパーソナリティ特性も受容、獲得し、女性が女性役割に加えて男性役割のパーソナリティ特性も受容、獲得するためには、性役割観において性別化傾向が強すぎないことも必要だと仮定した。そして男性では特に女性性得点と性別化得点が、女性では特に男性性得点と性別化得点が、負の相関を示すのではないかと仮定した。しかし、そのような関係はみられなかったのである。

従来より、性役割のステレオタイプと性役割の自己概念の間には隔たりがあり、自己概念はステレオタイプで現われるほど性別化されていない、と考えられてきた。本研究で示された結果も、自己概念（男性性、女性性）とステレオタイプ（性役割観）の間の隔たりを表した点で、先行研究と一致する。男性性、女性性の獲得は、性役割観の性別化を解消することで促進されるのではないようである。

(3)性別、年代による性役割観の多様性

何を男性、女性にとって望ましいパーソナリティ特性と考えるか、は性別によって異なることが明らかになった。特に顕著なのは、女性自身が女性役割を示すと考えられたパーソナリティ特性に対して、それを女性にとって望ましいと評価する傾向が弱いということである。

この理由について、青少年を被験者に本研究と同様の結果を示した柏木(1972)は、性役割認知にみられる性差は、性役割学習の背景をなしている現代社会の男性観、女性観や価値観（とくにどのような能力や特性が望ましいとされ、高い価値を与えられているか）と深くかかわることは確かであり、現代の能力社会では、知性や行動力が強く期待され、事実、知性や行動力を備えた人が社会的成功や生産に密接に結びつきやすい、と述べている。このような社会的背景の中で、また女性解放の主張が浸透していくことで、女性自身の側から現状の女性役割が否定されつつあるようであ

る。

ところで、性役割観の多様性は従来のアンドロジニー・スケールへの問題点を提起している。あらゆる被験者に適用されてきた、男性性、女性性項目である男性役割、女性役割のパーソナリティ特性は、必ずしもどの個人にも男性役割、女性役割のものとして認知されてはいないのである。

東ら(1982)も、男性性、女性性の自己概念を評価する際の枠組みが個人間で異なる点を指摘したが、この問題点を解決する方法として、まず第一に、性役割の自己概念とともに個人ごとの性役割観も同時に測定することがあげられる。つまり、被験者が男性性項目を男性役割として、女性性項目を女性役割として、確かに認知しているか否かをチェックするのである。第二にアンドロジニー・スケール項目を収集する際に、より広い社会層を評定者として用いることである。そして第三に、性別化得点を用いることを提起したい。飯野(1984)によれば、性役割は、どの程度社会の期待に応じた行動をするのか、といった現実的な側面と、性役割をどのように考えているか、といった認知的な側面と、自分自身について性役割をどの程度志向し、受容しているかを評価する自己概念の側面に分けられるという。ゆえに従来の男性性、女性性は自己概念の側面、性別化傾向は認知的な側面に対応すると考えられ、当然性別化得点が男性性、女性性を測定できることにはならない。しかしながら、男性役割、女性役割の内容が個人によって多様であり、流動的であり、決定が困難であることを考慮すれば、性役割の認知的側面である性別化傾向も、性別化得点を用いて、一つの性役割の指標として取り入れられることが許されるのではないだろうか。

(4)性別化得点の妥当性の検討

最後に性別化得点の妥当性を検討するために、男性の社会的役割に対する態度との相関を取り上げ、男性性、女性性得点と比較し考察する。

まず男性性、女性性得点と態度得点との間には、ほとんど相関が認められなかった($r = -.05 \sim .21$)。それに比べて、性別化得点と態度得点の間には、やや弱い正の相関が認められた(男性 $r = .39, p < .01$, 女性 $r = .31, p < .01$)。つまり、性役割観において性別化傾向の強い人は男性の社

会的役割も強く志向する関係が明らかにされたのである。ゆえに、少なくとも男性の社会的役割に関する態度スールとの関係に見る限りでは、性別化得点は態度レベルの両性具有性を測定するためには、男性性、女性性得点よりも妥当性があると思われる。今後、より多くのスケールを用いて性別化得点の妥当性を検討する必要があると言える。

引用文献

- 東 清和, 小倉千加子, 1982, 性差の発達心理, 大日本図書
- 東 清和, 小倉千加子, 1984, 性役割の心理, 大日本図書
- Bakan, D. 1966 *The duality of human existence*. Cicago, Rand McNally.
- Bem, S. L. 1974 *The measurement of psychological androgyny*. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162
- Bem, S. L. 1975 *Sex Role Adaptability: One Consequence of Psychological Androgyny*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643
- Bem, S. L. 1976 *Sex Typing and Androgyny: Further Explorations of the Expressive Domain*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 1016-1023
- Berzins, J., Welling, M. & Wetter, R. 1978 *A new Measure of Psychological Androgyny Based on the Personality Research Form*. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 126-138
- Dreyer, D. A., Woods, N. F. & James, S. A. 1978 *ISRO: A Scale to Measure Sex Role Orientation*. *Journal of Sex Role*
- Heilbrun, A. B. 1976 *Measurement of masculine and feminine sex role identities as independent dimensions*. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 44, 183-190
- 長谷川佳久, 1986, *Androgyny Scale 作成への一考察*, 関西学院大学卒業論文,
- 飯野晴美, 1984, 「性役割」という概念の多面性について, *心理学評論*, 27, 158-171
- 伊藤裕子, 1978, *性役割の評価に関する研究*, *教育心理学研究*, 26, 1-11
- J・シンガー (藤瀬恭子訳), 1981, *男女両性具有 I*, 人文書院
- 柏木恵子, 1972, *青年期における性役割の認知 II*, *教育心理学研究*, 20, 48-58
- Pedhazur, E. J. & Tetenbaum, T. J. 1979 *Bem Sex Role Inventory: A theoretical and methodological critique*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 996-1017
- 鹿内啓子, 後藤宗理, 若林満, 1982, *女子大生の社会的、職業的役割意識の形成過程に関する研究—性役割タイプと自己能力評価を中心として*, *名古屋大学教育学部紀要*, 29, 101-136
- Spence, J. T. & Helmreich, R. 1972 *the Attitudes Toward Women Scale: An objective instrument to measure attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society*. *Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology*, 2, 66-67
- Spence, J. T., Helmreich, R. & Stapp, J. 1975 *Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39
- 若林満, 鹿内啓子, 後藤宗理, 1981, *女性の社会的役割態度と職業自己イメージ尺度の構成と比較分析*, *名古屋大学教育学部紀要*, 28, 71-98
- 山口素子, 1985, *男性性、女性性の2側面についての検討*, *心理学研究*, 56, 215-221